

そ の 他

満州・宮古島・沖縄（PW）

埼玉県 斉藤敏男

私は大正八年九月七日埼玉県に生まれた。徴兵検査は第二乙種の貧弱な体だった。昭和十七年十一月二十七日、近衛野砲兵連隊補充隊（世田谷の三宿）へ召集で入隊した。

埼玉の生家と東京の勤務先との二カ所で、大勢の人に励まされ、在郷軍人の先輩たちにはいろいろな注意と要領を教わり、歓呼の声と盛大な見送りを受けた。

なにしろその当時、私は体重十二貫（約四十五キロ）足らずの体で、何を間違えて砲兵なんかにとられたの

かと思ったものだった。入隊時の身体検査も無事合格したので、即日帰郷の憂き目にあわずにすんだ。この不思議な思いは現在でも残っている。

入隊して三、四日は無我夢中だった。十二月一日、第一師団山砲兵第二十八連隊に転属になった。同日夜部隊は品川駅へ出発。品川駅前は他の部隊も来ていて、その混雑は大変であった。皆が同じ服装で、まだ日も浅く戦友の顔も覚えていないので、もしはぐれたら全く分からない。何とか指揮者から離れないで、無事列車に乗り込んだ。やや落ち着いたら「これで東京とも最後の別れ」と、言いようなない気持ちになった。

軍用列車は一路西へと東海道線を走った。車窓のカーテンは降ろして放しで、御殿場まわりで、岡山・広島を経て下関着。寒い日であった。そして無事釜山へ上

陸。小高い地形の街であった。

十二月七日ハルビン着。駅に着く前から足が冷えてたまらなかつた。全員車内で足踏みをした。零下二〇度と聞いた。列車を出て靴、その他被服はすべて防寒用のものに取り替えた。トラックで第三七九部隊の門に到着した。長旅の疲れと寒さで、朝までぐっすり眠つた。第三大隊段列に編入され、同地付近の警備と軍隊手帳には記入してある。

翌朝は十二月八日で日米開戦の一周年の記念日であった。部隊長の心の引き締まる訓示があり、私も初めて軍隊生活の第一歩を踏み出した。

我が山砲兵第二十八連隊（第三七九部隊）は三個人隊、九中隊で一中隊当たり砲四門、計三十六門あった。当然馬がいたので、馬の世話もした。今から振り返ると、よくやりとげたものだと思う。馬は一人当たり四頭割り当てられた。一頭に足が四本で計十六本の足の手入れは毎日朝夕二回。カラスが鳴かない日も、兵隊にどんな事情があれば、馬の手入れは絶対であった。ところが馬は賢い動物で馴れて上手な古兵隊には従順で

おとなしいが、生まれて初めてのドギマギと恐ろしさでいっぱい初年兵には、馬が人を馬鹿にするのか、言うことを素直に聞いてくれない。その上、馬によってクセがある。嘔む、蹴る、抱きつく、その他いろいろだった。相手が人間の兵隊なら教育して訓練すれば一人前になり、時にはビンタその他の制裁、おしおきをすればすむが、馬には話しても通じない。その上情けないことに、馬は陛下からお預かりした生きた兵器なので、大切にしてケガ、病気にならぬように細心の注意を払った。水飼いをしても、どの程度の量の水を飲んだか常に関心を持たねばならない。朝夕の手入れは馬体を背中、腹、首、尻などとブラシで前方から後方へとこすってやる。四本の足はワラで上から下へとよく摩擦してやる。満州は寒冷地なので、お湯で蹄の手入れをし、足の裏の中の馬糞を取り除き、蹄に油を塗る。これを確実に行わないと蹄さ腐乱という怖い病気になるってしまう。愈げられない。その馬の世話の中でも最も苦勞したのは、足である。馬四頭足十六本と先に述べたが、それは余程運の良い時のこと。一頭の

手入れを終えて別の馬に移って、ひよいと前の馬を見ると、せっかく手入れしたのに、また新しい馬糞で汚している。十六本が十八本、二十本にもなることが多い。馬の世話ばかりにマゴマゴしていると、人間様の自分自身の食事の時間もなくなるので大変だ。とにかく馬には参った。そのうえ学科として馬事提要、砲兵操典の二冊はしっかり読まなければいけない。幸いあの長い軍人勅諭はどうにか暗記できた。

毎日が内務、教育、馬の世話と目の回る様な超多忙な中に、八月十七日第九中隊分属、十月一日に一等兵を命じられた。

兵舎から外へ出て行軍、演習もよくあった。大休止、小休止のときは、よく状況を見て機敏に処置しないとすぐ出発となってしまう。馬の世話もまだで人間もまだ休んでいないのに早や出発となってしまうのだ。でも、馬で助かることもあった。行軍に疲れた時、眠い時は馬の尻尾を持ったり、綱を持って引っ張られて行くので助かった。ことわざで言う、「苦あれば楽あり」という感じだった。

山砲連隊にいたが、満州では実戦には参加しなかったので、実射はなかった。一門の砲は砲身、揺架、車輪、コーテイと眼鏡の四つに分解して駄載される。それに弾薬（一箱に四発入り）も必要だ。馬は一中隊で乗馬、駄馬で少なくとも十頭ぐらいいた。

山砲部隊では大別して、観測・射撃・段列に分かれていた。砲弾は榴弾（榴弾）と榴散弾に分かれていて、なおかつ信管を調整して合わす。射撃が始まると、観測班から連絡が入り、右へ〇〇メートル、左へ〇〇メートルと修正する。私は新兵で何も分からなかったので段列にいてマゴマゴしていた。

新兵教育は昭和十八年一月〜九月三十日まで行われた。班長は多田伍長だった。池田兵長には親切にしてもらい可愛がってもらった。

昭和十八年九月の阿城（ハルピンの東南の町）の演習は夜間訓練も交えて十日間行われた。帰路は疲れてフラフラだった。人は疲れてダウンしても、馬はしゃんとしていた。私はどんな訳か、いつも主流派に属していたので、わりと楽をさせてもらい運がよかったこ

とを今でも喜んでゐる。夜通し空腹の行軍をしていると、遠くに満人の家の灯がチラチラと見える。あの家の中では家族が平和に暮らしているんだと戦友と語り合うが、そのうちに内地の家庭を思い出して、つい寂しくなった。敵弾下の実戦と演習では気持ちも異なっているが、苦しい夜行軍であった。あの教育期間中の馬糞との戦いは忘れることができない。平成の現在では想像もできないし、また実感もないことだ。

昭和十八年十一月三十日、縫工兵を命じられた。ここでは精一杯まじめに務めて、長の鍛冶屋の息子さんには大事にしてもらった。

昭和十九年三月、部隊移駐のためハルビンよりチチハルへ移動した。

昭和十九年六月、軍令陸甲第一号により臨時編成下令。七月に第三大隊列に編入。

七月十日チチハル出発。十二日鮮満国境（安東）通過。

二十一日釜山港出帆。二十四日門司港寄港。

二十七日鹿児島港寄港。

八月十二日沖縄県宮古島平良港に上陸し、この日から島の警備にあたった。

馬は満州においてきた。ただし将校の乗用馬は連れてきた。砲はもちろんも人力で運搬し宮古島へ運んだ。この間、鹿児島に約半月間滞在した。毎日多くの死体が南の海から漂着した。内地を出帆した途端、敵の米潜の攻撃で沈没した艦船に乗っていた軍人の無念の死体だ。

とにかく、出帆した。船団は十隻で駆潜艇が爆雷を積んで警護してくれた。チチハルから宮古島まで何と一カ月以上の長旅であった。

昭和二十年一月一日、上等兵を命じられた。島ではもっぱら陣地構築と飛行場作り。現代のような立派な土木機械など何一つない。昔ながらの円びと十字鍬のみという原始工法である。当時米軍ではすでにブルドーザーやその他威力絶大の機械を有し、飛行場の滑走路などを物量にものを言わせて、あつという間に完成させていた。物量対大和魂ではその結果は初めから明白である。これは現在から五十年前を振り返ってのこと

である。とにかくその時は日本軍は攻撃精神一本やりで昼夜兼行で頑張った。

島の住民も軍に協力してくれて、さつまいもを蒸したのをよく食べさせてくれたものだ。が、宮古島へ上陸してきた陸海軍は合わせて三万人弱の大部隊だった。食物の補給もなく、空腹で仕事はきつい。満州は極楽、宮古は地獄と皆言い出した。おきまりの栄養失調とマラリアで、戦わずして病死者がたくさん出はじめた。マラリア用のキニーネもそのうちになくなり、もう処置ができなくなった。悲惨な状態であった。

「自昭和二十年三月二十六日至六月二十日、天號作戦（一級戦）に参加。自昭和二十年四月十五日至八月十五日、飛行場防衛戦闘に参加」と記入がある。敵の空襲はもう数えきれない程頻繁であった。もちろん友軍機は影も形もない。制海権・制空権は一〇〇パーセント敵のものだった。残念無念と言っても始まらない。戦友皆それぞれに玉砕しかないと覚悟をきめた。

戦局は日増しに悪化し、凄惨となる。前述の飛行場防衛戦闘では敵機の弾丸にやられて二人が戦死した。

その他に病死が十五人ぐらいいは出た。私たちは死体を焼く役目につき、十人ぐらいいの班で次々と火葬にした。島民の焼き場とか、野天とか、その時その時の都合で場所を移した。人体の中で腹が最も焼けにくいので、金具で腹を破りながら転がしては焼いた。やった者ではないと分からない大変な仕事であった。何の因果でこんな仕事をしなければならぬのか。焼く時間は、昼は空襲があるので夜間専門だった。

毎日、空腹との戦いが続いたある日のこと。敵のグラマン戦闘機が味方の弾丸で撃ち落とされて、乗員はパラシュート降下し、日本軍の捕虜となった。毎日攻撃されて、戦友が無念の戦死をするたびに、「おのれ、このかたきは必ずとる！ 友よどうぞ安らかに眠れ！」と、敵愾心でいっぱいの部隊員はそのままおとなしく捕虜扱いはせず、死んだ戦友の仇討と即刻に処刑銃殺した。フローレンスの墓というのを島の一隅に設けてあったのを私も目撃した。

余談になるが、この捕虜の件で、終戦後に第二十八師団長、納見敏郎閣下が島で自決された。原因は噂に

よると捕虜処刑の責による戦犯指定の屈辱から免れるためだったらしい。痛ましいことこのうえない。謹んで合掌。

あれこれとあったその夜、山砲部隊は歩兵の穴掘りの手伝いをやうされた。例により毎日空腹との戦いが続く。

昭和二十年八月十五日、戦局が一変し、思いもかけぬ終戦をむかえた。でも連隊本部からは一安心するのは早い。戦闘を再開するかもしれないから、現在の態勢をそのまま維持して情勢を見極めよ一とのお達しがあった。

昭和二十一年一月十日、宮古島を出発して沖縄本島へ向かった。宮古島にいた間は、今思うと恥ぢかしいやら情けないやら、ただもう食べることに必死の苦しい毎日であった。

階級は兵長になった。何のメリットもない進級であった。内地で首を長くしてそれぞれの夫、父、息子の無事帰還を待ち望んでいる留守家族には誠に申し訳ないが、終戦後宮古島に在る間に、可哀想なことだが病氣

で死亡した者が多い。本人にも留守家族にも、申し上げる言葉もない。

沖縄本島へ移ると服の前と後ろに「PW」とマークのある捕虜服を着せられて、ここでも空腹に悩みながら、死体の片付けやら、嘉手納空港のカマボコ兵舎建設の手伝いなどをやった。

最後に、昭和二十年十一月十四日、山砲兵第二十八連隊の『まごころ』第十六輯の内容の一部を披露したい。

(本冊子は精神要素の陶冶鍛錬の参考資料として部隊内に於ける善行美談の輯録せるものなり)

縫工兵ノ至誠
連隊長 梶 松次郎)

第三大隊段列陸軍上等兵齋藤敏男

右ハ縫工兵トシテ段列内ノ諸被服ノ補修修理ヲ命ゼラルルヤ僅カノ休憩時間ヲモ惜シミ休務ノ日モ昼休ミノ時間モ又作業終了時限後ハ薄暮ニ至ル迄黙々作業ニ全力ヲ傾注シ而モ修理品ノ山積補修材料ノ不足等ノ悪条件ヲ克服シ創意工夫ニ務メ其ノ任務達成ニ邁進セリ

斯クシテ段列ノ諸被服ハ丁寧懇切ナル修理ニ依リ見違エルバカリニ更生シ其ノ成果ヲ挙げ得タルハトリモ直サズ同上等兵ノ旺盛ナル責任觀念ト強烈ナル官給品愛護……ナリ（点線箇所はすり切れて滅失し不明）

上等兵ハ平素ヨリ其ノ言動誠心篤ク後輩ヲ助ケ先輩ノ古兵ニ克ク服従シ内務勤務共ニ内務班ノ團結ニ大ナル貢献ヲ為シアリ右ハ誠心克ク部隊精神ヲ遺憾ナク發揮セルモノニシテ他ノ範タリ

山砲第二八連隊第三大隊段列

第四内務班長 原 伍長 印

本冊子ハ合綴シ永久保存シテ精神教育ノ資ニ供スルモノトス

私の従軍期間中の服務生活状況に対するありがたい、またと得られぬ、金銭にも替えられぬ、連隊長からの感状と悪い、家宝として子々孫々に伝え、精神教育の資とし、日本の国民精神の振興にもと考えている。

いわれなき終戦後の体験

愛知県 椎原芳郎

私は昭和十七年徴集の第一乙種現役兵として満州承德（熱河省）の満州独立守備歩兵第三大隊第三中隊に配属された。

万里の長城の麓の山中にある満人部落の中に駐屯している第三中隊で、初年兵として一期の検閲が終わわり、暗号教育を受け、司令部要員として終戦まで暗号兵として勤務をした。

暗号下士官としての教育を受けている最中に終戦となり、錦県で司令部に復帰し、遼陽で武装解除となり、海域に集結させられ、シベリアのチタに抑留されることになった。この抑留中の労苦について以下に記す。

入ッ早々、穴掘りをさせられたことがあった。

昭和二十年十一月九日のソ同盟革命記念日に満州を出発し、二十六日チタ市近郊のチノリフスカヤの収容